

光秀の周山城「見せる城」

右京・京北 二の丸の城門、石垣遺構発見



二の丸の石垣などの遺構。宝篋印塔(写真中央)が転用石として用いられていた



周山城跡の発掘調査で見つかった二の丸の城門礎石(手前)と階段の遺構(ともに28日午後、京都市右京区京北周山町城山)

戦国武将の明智光秀が京都市右京区京北に築いた巨大な山城「周山城」跡の発掘調査で、二の丸の城門や石垣の遺構が見つかったと、調査した市が28日発表。山中にもかかわらず、城門は大型で格式の高い形式で築いており、織田信長や豊臣秀吉による織豊期城郭らしい「見せる城」の特徴をよくとどめる。市は近世城郭への進化の過程が分かる考古成果としている。

周山城は光秀が主君・信長を討つ本能寺の変(1582年)直前の79〜81年ごろに築かれたとされる。城域は黒尾山(標高509.9)に続く尾根沿いの東西約1300㍎、南北約700㍎に及ぶ。84年に秀吉が一時入った後、廃城になったとみられている。



みられている。

市文化財保護課によると、城門跡は本丸東側に位置する二の丸で見つかった。出入り口の「虎口」付近を調べたところ、石積み

の階段(計11段)とともに、門の柱を支える礎石の一部が確認された。その配置から、門は幅5・4㍎、奥行き1・8㍎と大型の上、当

織豊期の特徴とどめる 「近世城郭への進化過程」

時の城では珍しい高い格式を誇る「薬医門」の形式だったという。

石垣は虎口の南側斜面で幅7㍎分を確認した。下部に当たる高さ約2・5㍎が残るが、かつてはより高く築かれたと推定される。工法は自然石を中心とした「野面積み」だが、石材は丁寧に積み上げられており、目立つ場所に宝篋印塔の台座などの転用石を組み込んでいた。見栄えを強く意識した仕上がりと思われる。

織豊期以降の城郭では、門を抜けた先に石垣などで四角く囲う空間を設けることで周りから狙い撃てるようにして、敵の侵入を妨げる「枳形虎口」が定着するが、城門跡近くではこうした空間は見つかっていないという。

京都先端科学大の中西裕樹特任准教授(城郭史)は「周山城跡は文献が少なく、イメージしにくかったが、光秀が本格的な城を築いていたことに驚いた。城門や石垣は明らかに見せるための造りで、山の上まで人が来ていたこともわかる」と話している。

発掘は12月13日まで約100平方㍎を調べる予定。右京区京北周山町城山。現場見学もできる。同日までの平日午前10時〜午後3時。現場事務所080(1)402(4)2888。(堀内陽平)